

「煩悶」の源流としてのアジア主義

—『順逆の思想－脱亜論以後－』を素材として—

Pan-Asianism as Roots of “Agony”:

Treating with *Thought of Loyalty and Treason-After Departure from Asia/Great Powers*
 (“-Zyunngyaku-No-Shithou-Datuaronn-Igo-”)

山之城 有 美

Yumi YAMANOJOU

(日本女子大学大学院人間社会研究科 現代社会論専攻博士課程後期)

要 約

戦中に自己存在の拠り所を日本ロマン派に託した原体験を持つ橋川文三（1922－83年）は、戦後において、日本ファシズムの本質的要因は1930年代頃に顕在化したとされる「前近代／近代」の狭間での自己存在をめぐる自発的な「煩悶」にあることを想定した思想家である。本研究では橋川がその「煩悶」の源流を、明治期の政治家達による「列強への確信的恭順」に内在する帝国主義への抗いに見出し、さらに大正期頃にはそれが国内の大衆に広く伝搬することで国外・国内一体型の革新性として結実していったという歴史像を語っていることに着目する。その中で橋川は、好悪や優劣といった相対的感情、あるいは外的環境への合理的対応をする合理的リアリズムに恭順することなく、個人的実感を伴った「敬愛」を確かな契機としながら自己存在を内在的に確立していくことの重要性を示唆している。

[Abstract]

Bunzou Hashikawa (1922-1983), who typically attributes the reason for his existence to the Japanese Romantic School during wartime, is a thinker who assumed in the postwar that the essential cause for Japanese fascism was the voluntary “agony” of self existence between “pre-modern and modern,” which manifested in the 1930s. This study observes that his historical image of the source of that “agony” was found in the resistance inherently to Imperialism which is “the resistance to foreign powers as the intentional loyalty to the Great Powers” by politicians in the Meiji period. More of this innovation was transmitted to the domestic public with overseas integration becoming widespread in the Taisyo period. He also suggests the importance to establish self existence inherently depending on “love and respect” with personal actual emotions, not relative feelings such as likes/dislikes and advantages/disadvantages, and not rational realisms which give rational responses to external environments.

はじめに

いわゆる戦中派世代である橋川文三(1922－83年)は、戦中に自己存在の拠り所を日本ロマン派に託したという強烈な原体験を持つが、戦後においてもそれに依拠した日本ファシズム像を描こうとした思想家である¹⁾。橋川は、戦中において多くの人々が日本ロマン派に自己存在の拠り所を積極的に求めていたことを真実として見つめていたが故に、戦後において日本ロマン派をタブー視する近代主義やマルクス主義の潮流が台頭したことに強い欺瞞性を覚え、日本ロマン派に

は現状肯定に留まらない必然性が内在していたことを示そうとした。

橋川は1957-60年に初出した本格的論考『日本浪漫派批判序説』²⁾〔橋川 2000b〕にて、戦中の日本ロマン派が出現した起源とは、1930年代頃に顕在化したとされる「近代システム」が生んだ疎外感への「失望的」抗いにあるとみている。そして橋川は、前近代的価値である「自然」と近代的価値である「人為」の狭間で、人々が自己存在をかけて自発的に悩むこと自体に本質的価値を見出し、これを「煩悶」という普遍的なものとして意義付けている。この橋川の語る普遍的「煩悶」とは、橋川自身が戦中の実体験を普遍的歴史像へ昇華して創り出したものといえ、ここには近代以降を生きる各人の実感を伴う特殊・個別的な「煩悶」が、普遍的な「煩悶」を媒介として他者の特殊・個別的な「煩悶」へも繋がっていることが示されている。

さらに、戦後日本社会を生きる人々が未だにこの「煩悶」に対峙・克服出来てないことを危惧していた橋川は、1964年に初出した『昭和超国家主義の諸相』³⁾〔橋川 1964=2001a〕で、1930年代頃を生きていた人々の「煩悶」を原初形態と中間形態と完成形態という個別の3段階に分類して提示することで、戦後日本を生きる各個人の「煩悶」と重ねてみせようとしている。特にこの作品で橋川は、近代国家の制度である家父長制への抗いという潜在的意図を持ちながらテロを通じて「父親殺し」を謀ったとされる煩悶青年⁴⁾を原初形態としながら、「煩悶」をいうならば「超国家・主義」⁵⁾という国家論で語り直している。このことから橋川は、テロリストという極端な存在に陥った個人に対しても、「煩悶」という普遍的な動機を見出して寄り添っていたといえ、ここに人々の多様なレベルの「煩悶」を包括し得る橋川の眼差しが取れる。

以上の国内レベルの語りをふまえ本論では、橋川が1963-73年に初出した諸論考を掲載した『順逆の思想—脱亜論以後—』⁶⁾〔橋川 1973〕を素材に、1930年代頃に顕在化したとされる「煩悶」の源流を、大正期頃の大衆さらには明治期頃の政治家達の心情にまで遡って語っていることに着目したい。従来の政治家とは、現実社会で交渉や決断をして実務をさばく立場にあるが、橋川は留保を付けながらもあえて政治家達を思想化して観念レベルで語っているのである。そしてこの論考における橋川の語りには、明治期頃～大正期頃を生きた日本の人々が、伝統的価値の象徴としてのアジア／近代的価値の象徴としての西欧の列強諸国の狭間で、自発的に自己存在の寄り所を求める契機を持っていたことが想定されており、それが「順逆」の感情として表現されているのである。

橋川は既に『日本浪漫派批判序説』にて、実現不可能と知りながらもそうせざるを得ないという美学的態度のニュアンスを元々は持つ「イロニイ」を、日本ロマン派の失望的抗いという政治的美学の「イロニイ」として表現していたが、本論では、アジアを尊重して寄り添いたくても列強に屈せざるを得ない危機的状況から生まれた「列強への意図的恭順」というニュアンスを持つ「順逆」という言葉に、「イロニイ」を内在させて語り直している。そして橋川は、伝統的価値／近代的価値の狭間での確かな内在的格闘の末に例え近代の帝国主義の価値に回収されていったとしても自発性そのものに本質的な価値を見出す為、伝統的価値と近代的価値とを(あ)切り離してどちらかに価値を置く発想、(い)直結させた発想、については自己と対峙していない発想であることを見抜いて欺瞞視する視座があった。

特に本作品において橋川は、明治期頃の政治家達に代表されがちである「脱亜」派と、玄洋社や黒龍会⁷⁾などの大陸浪人に代表されがちである「興亜」⁸⁾派とが硬直的な対立関係として描かれ

がちであった従来の明治期像とは異なり、明治期の政治家達の「興亜／脱亜」の狭間で揺れる心情そのものを「敬愛／侮蔑」の観点から描きながら、列強への恭順に回収されるに至った心情にも元々は内在していた近代をめぐる本質的な葛藤の契機を唱えている。そして橋川の語りからは、明治期頃の政治家達の「敬愛／侮蔑」をめぐる葛藤する心情が、大正期頃には社会改造を包括的に試みた老荘会⁹⁾に象徴されるであろう「大衆」に新たに継承され、その後、老荘会から派生した猶存社に最も代表されるであろう「昭和維新」に顕在化したという流れで、いわゆる右翼の潮流の見地のみではみえない、「超国家・主義」に至る人々の自発性の存在を浮き彫りにしようとしていることが分かる¹⁰⁾。また橋川の語りには、明治期頃～大正期頃に自己存在確立の為に不可欠と想定された「敬愛／侮蔑」をめぐる葛藤に至らないものとして、「敬愛」感情が消滅している状態にあたる「侮蔑」感情や、感情が生じる余地のない合理的思考を問題視する視座もある。

橋川のアジアへの「敬愛／侮蔑」を通じた「興亜／脱亜」をめぐる観念的なビジョンは、帝国主義というパワーポリティクスの実現への対処に際しては実質的な限界があり、また「敬愛」についていえば華夷秩序に屈するという対等関係ではないニュアンスが含まれているといえる。しかし本研究ではこの橋川のビジョンについて、観念レベルでものを捉える思想家故にリアリティへの限界が露呈されているものと捉えずに、むしろ、日本ロマン派に自己存在を託した経験を持ちどうにもならない危機的状況へのリアリティに敏感であった橋川故に、明治期頃～大正期頃の日本人々が直面したであろう近代帝国主義から生じた疎外感に寄り添うべく、実現不可能なことを承知な上で理想的な心の拠り所としてのアジアへの「敬愛」を創造したものと考えてみたい。その為本研究では、現実的パワーポリティクスへの戦略的対処の在り方と橋川の理想的ビジョンとの間に生じているズレ自体に、日本ロマン派を客観的に批評することを本質的意図としつつも実際には日本ロマン派を脱し得なかった橋川の苦悩そのものが現れているとみてみたい。そしてそれ故に橋川の語る「敬愛」には、橋川が持つ可能性と限界が表裏一体のものとして現れていると意義づけられる。

本論考の構成としては、この『順逆の思想』に収められた橋川の諸論文の初出年が(1)明治百年と(2)政治の季節にあたる1968年前後に集中していることをふまえた章立てとしている。ここでは橋川が1967年に初出した論考「安保後八年目の独白」〔橋川 1967=2001b〕にて、安保後において明治期にあたる1905年の日比谷暴動を想起させ、日比谷暴動が(A)明治国家の崩壊(B)そして大正デモクラシーという欲望の体系(C)後にファシズム基盤の契機になった、と語っていたことを押えておきたい。その上で本研究ではまず1章では、1968年当時の冷戦構造下でのアジア外交を危惧していた橋川が、約百年前の帝国主義下での政治家達的外交を通じて「列強への意図的恭順」に内在している抗いの感情を想起させていたことに着目し、それが1930年代頃に顕在化した「煩悶」の源流に位置付くことを示す。次に2章では、1968年当時のいわゆる政治の季節に際して大衆運動の可能性と限界を認識していた橋川が、大正期頃に台頭してきた大衆を想起させていたことに着目し、大衆が明治期の政治家たちの「敬愛／侮蔑」をめぐる自発的な葛藤を国内外一体化した社会変革運動に昇華させながら引き継いでいる、という主張を持つことを示す。

特に2章については、橋川が既に『昭和超国家主義の諸相』で唱えていた1930年代頃に顕在化したとされる①「父親殺し」故にテロに至った煩悶青年などを象徴とする「原初形態」②青年将校や農本主義者などを象徴とする「中間形態」③伝統的国家から飛翔するビジョンを持っていた諸

人物を象徴する「完成形態」という3段階の「煩悶」に対応するものとして、『順逆の思想』における大正期頃の諸人物の分類に① 後に東亜連盟と結びついた、贖罪を背負ったアナーキスト② 日本側にも中国側にも迎合しなかった大陸派軍人、アジア主義者も包括した老荘会に関わりがあった国家社会主義者③ 多くの青年将校が共鳴した「昭和維新」のビジョンを示した「超国家・主義」者が位置付くと想定される。その際には橋川は、既に『昭和超国家主義の諸相』において北一輝¹¹⁾を「煩悶」の完成形態の代表的人物に位置づけていたが、『順逆の思想』においても北を大正期の社会改造運動の理想形として改めて指標にしていることが分かる。

最後に本研究で素材とした『順逆の思想』について、橋川の他の代表作との関係で押えておきたい。総括してみると橋川は、初の本格的論考『日本浪漫派批判序説』で日本ロマン派の原体験を基に自己存在を守る為の「煩悶」を1930年代像としてまず提示し、次の代表作『昭和超国家主義の諸相』では「煩悶」を3段階にしながら国内レベルの国家論として1930年代像を示した上で、『順逆の思想』では明治期頃～大正期頃に想定される「煩悶」の源流をアジア／列強をめぐる「順逆」の感情に内在させながら国内外一体化させたレベルで示し直している。その上で、1984年に刊行された作品である『昭和維新試論』¹²⁾ [橋川 2013]で橋川は、帝国主義に憧れと反発を併せ持っていたとされる大正期頃～昭和初期頃の様々な人々を想定しながら、帝国主義そのものの問題を内在化させた3段階の「煩悶」として再び国内レベルに還元させているといえる。

なお本研究においては橋川が、アジアへの加害性／列強からの被害性を、表裏一体的なリアルなものとして実体視する必要性を示唆していたことも示したい。その際には橋川が『順逆の思想』にて戦後日本の社会状況を危惧する故に、(Ⅰ)戦後間もない頃から既に唱えていた日本マルクス主義批判を、「実感」の伴わずに形骸化したとされる「理論」への批判を通じて改めて強調したこと(Ⅱ)冷戦下でのアメリカへの追従外交故に、戦中の「アジア」への加害性に対する独自アプローチが戦後の日本に欠如しているという指摘をしたこと(Ⅲ)さらには、冷戦下でアメリカに追従していた為に、おざなりにされたアメリカから受けた戦中の被害性に関する人々の無自覚化をも示唆していたこと、を念頭にしていきたい。

特に(Ⅱ)に関していうと、「脱亜論以後」という副題を有している『順逆の思想』に掲載されている橋川の諸論文には、帝国主義への追従に甘んじなかったとされる近代中国を評価する竹内好の影響が見受けられる。竹内は、1963年に初出した論考「解説 アジア主義の展望」[竹内 1963 = 1977: 12]にて、「アジア主義は、膨張主義または侵略主義と完全には重ならない」と唱えており、さらに橋川と共編をしていた作品『近代日本と中国・上』[竹内・橋川 1974]では、ニクソン訪中で受けた日本中のショックは冷戦下でアメリカ追従外交に甘んじていたことに起因するものであるという主旨の警鐘を鳴らしていた。またこの時期の橋川についていえば、『黄禍物語』¹³⁾ [橋川 2000]にて冷戦下でみえるアメリカのアジア観として、ベトナム戦争にみる人種戦争を論じたりしている。そして橋川は明治百年にあたる1968年に初出した『順逆の思想』の冒頭に掲載している論考「福沢諭吉の中国文明論」[橋川 1968a=1973]においては、日本の近代化が権力や価値の一元的集中で成立したということや、日本の社会集団において個人の自立化が困難であるということなど国内の危機意識を持ちつつも、現代日本が高度な技術社会への信奉者として本質的にアジアに背を向けていることを念頭にした問題意識を持っていたことが分かる。

1 章 明治百年のアジアへの眼差し ―明治期頃の政治家達にみる「煩悶」の源流―

1-1 列強への意図的恭順に抗いを内在させていた「脱亜論」

前述した橋川の1970年前後の問題意識を念頭に、本節では橋川の論考「福沢諭吉の中国文明論」を中心に、橋川が(イ)福沢の「脱亜」のスタンスを所与のものとして描いていた当時の諸々の福沢論や(ロ)儒教批判をする福沢に焦点を当てた丸山眞男の「脱亜論」などを批判しながら、福沢の帝国主義への抗いの心情が確信的恭順に回収されていったことを、福沢のアジアへの敬愛／侮蔑をめぐる葛藤という観念レベルからあえてアプローチしていたことを示したい。まず橋川はこの論考で、「心情的にはラジカルな中国敬愛感と、現実政治的には極端な侵略主義とが同一人物のなかに含まれていた例も珍しくない。」として日本人の対中国態度の「アンビヴァレントな動機」を提示している(橋川 1968a=1973: 22-24)。橋川は福沢については、彼の文明論は社会科学の文明論として現代の思想史的方法としても一定の普遍的達成度を持っているとし〔橋川 1968a=1973: 15〕、旧文明の象徴としてのアジアを確信的に克服すべき実体とみていた人物としているが、その実体性は後に帝国主義日本においては混沌になってしまったと述べている〔橋川 1968a=1973: 48-49〕。さらに橋川は福沢が、日本の独立を優先するあまり、列強の干渉を受けて危うい立場にあった中国を冷淡にも「他人事」〔橋川 1968a=1973: 31-32〕とみていたとし、このことが福沢に中国無能論および中国提携論から中国蔑視論へ至ることを許す原因となったと捉えている〔橋川 1968a=1973: 18-19〕。この橋川の視座からは、福沢には帝国主義を所与の外在的危機として認識する故に、中国への「敬愛」の契機が元々弱いことで中国蔑視に至ったことを必然視している様にみえる。しかし同時に橋川には、福沢の前提として中国が他のアジア諸国と比べものにならない程の確固たる文明国としての地位を築いてきたことへの別格とみなす眼差しがあり、それ故に中国以外のアジア諸国を相対的にフォローするスタンスをとっていたという想定も考慮していることが窺える。

特に着目したいのは橋川が福沢の中国認識について、「他人事」のレベルを超えて「脱亜」や「謝絶」といった高圧的レベルにエスカレートしたのは、韓国問題と国内の政治的気流の変化であったと述べていることである〔橋川 1968a=1973: 31-32〕。その際に橋川は特に福沢の韓国への眼差しに着目し、「韓国の青年政客たちの風貌のなかに、彼(福沢)自身のかつての前半生を見る思いをいだいたのもあろう」と福沢の韓国への共感を示唆しながら、「同じアジアの隣国といいながら明治初年における日本指導層の心理の中では、中国と韓国とが、ある微妙な差別のもとに見られていたのではないかと問題提起し、「福沢は当代まれな醒めた精神の持主であるが、こと韓国に関しては、むしろ意外なほど情にもろいようなところさえ示している」と指摘している〔橋川 1968a=1973: 34-35〕。このことより橋川の視座には、中国と韓国への福沢の感情の差異に着目することで、福沢の韓国への「情」が例え自己投影に起因するものであっても、本質的には帝国主義を外在的環境として認識しているに過ぎないことを示唆しているものと思われる。このことより橋川は、韓国への「情」という一見は「敬愛」の様に見えるものについても、多分に外在的・相対的な要素が強いものとして観念レベルで危惧していたといえる。

橋川は、福沢が「主体的決断」をもって唱えた「脱亜論」¹⁴⁾という旧文明からの確信的な離脱の実体性が後世に恣意的処理に陥っていったとし、その要因を列強への他律的追随としている〔橋

川 1968a=1973: 49-50]。しかし本論考全体を通じた橋川の語りからは、「脱亜論」という「主體的決断」する以前より、福沢自身が帝国主義的環境を外在的な所与のものとしたという意味合いを橋川が持たせているといえる。このことは橋川が竹内好を参照しつつ福沢批判を、①日本の近代化に際する権力集中化への関与②社会的実態や現実への無理解、という観点から行なっていることからより分かる。

なお橋川は、1972年に初出した論考「福沢諭吉と岡倉天心」〔橋川 1972b=1973〕においては、福沢と対照的な理想の人物として岡倉天心を論じている。橋川は本論考において、福沢を中国文明の内在的理解に欠けるが故にアジア文明全体を限定的にしか捉えてないと語る一方〔橋川 1972b=1973: 64-65〕、岡倉については「脱亜論」の真意が消滅した後にアジアへの侮蔑感を人間そのものに内在する多様性を受容することで克服しようとした人物として描いている〔橋川 1972b=1973: 68, 76〕。このことから、この時期の橋川が人間そのものをめぐる視座で、アジアへの「敬愛」を高めていたことが窺える。

1-2 中国の伝統的外交へ生じる感情／合理的思考

本節では橋川が1969年に初出した「伊藤博文と中国」〔橋川 1969b = 1973〕において、帝国主義の圧力の下で近代的価値に重きを置かざるを得なかったとされる伊藤博文と伝統的価値に重きを置いていたとされる李鴻章とを相互信頼のある同志として対比させつつ、そこに異質の合理的リアリストとされる陸奥宗光を入れた構図で外交を論じていることに着目してみる¹⁵⁾。その際には橋川が、外交とは現実的な実務上の問題であることを理解しながらも、実質的には国外／国内の狭間で調整に苦慮したとされる伊藤や李などの心情を観念レベルで語るという特徴がある〔橋川 1969b = 1973: 79〕。なお本論文での橋川には、竹内好への依拠は直接ないものの竹内の意図との類似点として、中国の李の非近代性の強い外交スタイルに確固とした自律性を捉えている側面がある。

本論文において橋川は伊藤を、列強本位の意味合いが強いとされる国際的公法という論理の絶対性／脆弱性を理解しつつ、中国政策への国内の意思統一に苦慮した人物として描いている¹⁶⁾。その際の橋川の伊藤に関する語りの特徴としては小説家・久米正雄の伊藤論を引用しながら、伊藤の外交スタンスが中国保全論から中国への「義戦」容認に変わってしまった契機として、伊藤が「中国問題に日本が一步を誤ることは、直ちに中国の解体と列強の介入をもたらし、それはひいては日本の進路に、收拾つかない混沌をもたらすであろう」〔橋川 1969b = 1973: 90-91〕とみていたとすることで、国際政治力学を所与の外在的なものと認識した伊藤の実務的対処を示唆していることがある。ここには、列強への確信的恭順に至った伊藤の抗いの本質的な弱さが表現されているといえるが、同時に、伊藤は「義戦」容認に至ったものの確かに中国保全という契機は持っていたことも示されている。

さらに橋川の伊藤に関する語りには、列強の圧力という外在的契機によって帝国主義的構造が再生産されることで侮蔑感が深刻化していくことへの危惧も見受けられる。この橋川の危惧は、極端に西欧化した外交スタイルの日本が伝統的な外交慣例の続く中国に、かつてベリイが日本に加えたやり口と同様の圧力を加えたという橋川の語りから分かる〔橋川 1969b = 1973: 103〕。またこのことは橋川が、「日本側は清国の外交技術の「東洋性」にいわば自己自身の過去の姿を見

る立場にあり、その優越感に立脚して、容赦なく清朝外交の因襲性を侮辱的に見下した」と述べ、日本は帝国主義に際する危機の当事者で自己投影の感情があったにも関わらず、同様の危機的立場であった中国を実質的には侮蔑していたと述べていることから理解出来る〔橋川 1969b = 1973 : 103〕。さらに橋川は伊藤が「義戦」を容認するに至った要因についても、伊藤が帝国主義の危機を必然なき偶然と認識して帝国主義そのものの問題性を見抜けなかった為としている〔橋川 1969b = 1973 : 104〕。これらの橋川の伊藤の外交に関する描き方からはまず、伊藤の中国への姿勢は当初から外在的対応の傾向が強く自律性を担保する抗いの契機が元々弱い故に不安的な相対的優劣付けしか出来ないという問題提起が浮かび上がってくる。しかし橋川が、伊藤が至ったアジアへの眼差しは福沢と共通すると捉え、特に日清戦争に際して「伊藤は…予定どおりに広島談判のぶちこわしを達成した。その口実とされたのが清国全権の委任状の不備ということであり、清国外交の前近代主義への不信ということであった。まさに日清戦争は、戦争においても外交においても、福沢諭吉のいわゆる「文明と野蛮の戦い」であることを伊藤らは誇示せんとしたわけである」〔橋川 1969b = 1973 : 128〕と述べていることから、橋川が、福沢と同様に伊藤にもアジアにおける中国文明への別格の眼差しの前提を想定していたことが窺える。

また本論で橋川は、陸奥宗光の合理的リアリストとしての人間像に迫りながら、伊藤と陸奥との差異について李鴻章をめぐる対中外交を通じて語っている。まず陸奥の人間像について橋川は、「陸奥の(日清戦争に関する)この文章は、両国間の敵対感情の形式をいわば国民心理の流れとしてとらえたものであろうが、同時に、そうした心理が、いかに国際関係における冷徹な権益競争の論理と結びつくかについても、自ら一定のヒントを与えている」と述べ、陸奥が伊藤の様な道義的「義戦」を支持する人物ではないとしている〔橋川 1969b = 1973 : 106 - 107〕。さらに橋川は陸奥の外交について、近代国際法における外交上被圧迫者の立場性を冷静に「作為」したとしている〔橋川 1969b = 1973 : 109 - 110〕。これらの橋川の語りからは、道義的スタンスの強い伊藤とは異なる、合理的スタンスの陸奥像が受け取れる。その上で橋川が、この陸奥の合理的で冷徹な外交スタンスが中国の李の伝統的な外交スタンスとかがみ合わなかった故に、従来は日本の強引な態度に対しても協調外交路線を続けていた李を強硬路線に変え、さらに李が韓国へも強硬になったことでそれへの反感をきっかけとして甲申事変が生まれたと語っている。このことから、福沢の「脱亜論」の契機ともされる甲申事変の本質的な原因が李の外交スタンスへの陸奥の無理解にあるとしていることが読み取れる〔橋川 1969b = 1973 : 115 - 117〕。いうならば橋川の語りには、陸奥の李への合理的リアリズムに基づく無感情が、李を強硬にした結果、韓国にも悪影響を及ぼしたとみていることが取れる。但しこの橋川の語りは、外交政策という国家間の現実レベルの話と、個人の心情という観念レベルの話を混在させている中で、李(さらにいえば伊藤も)が国外／国内の圧力の狭間で調整に苦慮した結果として妥協的・意図的に伝統的・消極的といわれる外交を展開していたという視座が欠けていたものと思われる¹⁷⁾。

なお橋川は、日清講和に動じない李に対する心情的な思い入れをもつ伊藤／合理的思考をする陸奥の差異を、①中国と列強のどちらを暗黙に優先させているか②李に対する共感的感情が沸き起こるかなどを通じて示している。その際に橋川は、①については「陸奥は事前に日本の要求を「公示しもしくは暗示し、欧米各国をして予め内諾黙許せしめ、以て他日の誤解を防止する方針」を可とした」が「伊藤の方針は、一切の予備折衷的な会談を抜きにし、責任ある両国全権の会談

において、はじめて講和条件を提示するという考えであった」〔橋川 1969b = 1973 : 121 - 122〕と述べ、伊藤と陸奥が列強と中国のどちらに向いているかの差異があることを示唆しているといえる。また橋川は、②については「伊藤はここで、あたかも議論好きな書生に還ったかのように、李鴻章と大論争でもしたくなったように見える。しかし、冷徹な実務家である陸奥は、むしろそうした伊藤の昂奮をここでも冷やかに抑止した。…伊藤は心からの清国の屈服を欲しており、陸奥は…外交技術の可能性のみを追求したといえるかもしれない」〔橋川 1969b = 1973 : 142 - 143〕と述べ、李に対する感情の有無を通じて伊藤と陸奥の特質の差異を示していると解釈出来る。また橋川が「陸奥がそこ(李が帝国主義的近代化に動じないこと)に清国外交の老獪^{かい}さのみを見たのに対し、善意の開明主義者伊藤は思想的に啓蒙すべき「後進性」を認めたということになるであろう」〔橋川 1969b = 1973 : 143 - 144〕と述べていることから、中国へ対峙する際の質をめぐる陸奥と伊藤の差異が改めて確認出来るが、両者ともに近代化へ価値を置いているという側面が捉えられる。

最後に橋川の語りは、陸奥と伊藤に共通した李及び中国への敬愛感の弱さが日本の国民にも波及したことまで描いていることを示したい。橋川は、「伊藤や陸奥の認識と感覚においては、この事件(李鴻章狙撃事件)の処置を一步誤るならば、列国の干渉と清国の主戦意欲の高揚をまねくであろうという配慮が必然であった。その点、陸奥が嘲笑した国民心理の動きと実質的にはかわったものともいえないはずであったし、もともと国民の清廷や李鴻章に対する軽侮感というのも、彼ら自身がこれを醸成したといわれても仕方がないはずのものであった」〔橋川 1969b = 1973 : 139〕と述べており、国民の中国への侮蔑感を醸成したとされる政治家達の問題を示している。このことより橋川は、当時のエリートというべき政治家達が大衆の感情を誘導するかたちで、近代の帝国主義に端を発するアジアへの「敬愛／侮蔑」の感情を普及させていたとみていることが分かる。

2章 政治の季節における大衆観 —大正期頃に継承された「実感」の行方—

2-1 大衆の台頭を「性悪説」から眼差した人間不信観

前章においては、橋川が明治百年にあたる1968年頃に想起した明治期頃の近代をめぐる「敬愛／侮蔑」の感情の現れを考察したが、本章においては橋川が政治の季節にあたる1968年頃に想起した大正期頃の大衆への「敬愛／侮蔑」の継承の像を考察してみたい。

本節では橋川が1968年に初出した論考「北一輝と高島素之」〔橋川 1968b = 1973〕で、北一輝を指標としつつ、マルクス主義者として平民社を経て国家社会主義に至った高島素之の語りを通じて〔橋川 1968b = 1973 : 200 - 201〕、大正期頃の大衆像を展開していることに着目する。本論の橋川の語りは、人間の本性を「性悪」と想定した高島素之を、人間を社会的存在とする北一輝のビジョンと対比させながら展開されているが、このことから両者の人間像の違いが自己存在の肯定感の有無にまで投影されるという橋川の観念レベルの視座が捉えられる¹⁸⁾。なお本論の橋川の語りには、戦後日本社会において影響力を持ち続けていた日本マルクス主義への改めての批判のニュアンスを含むものとして、理論と生活の間に潜む乖離に目をつぶった大正期の社会主義者を高島が「自己欺瞞」や「自己陶醉」として嫌悪していたとする語りがある〔橋川 1968b =

1973：203－204，207〕。さらに橋川は高島を描く際に、社会主義への私的疑惑をロシア革命の衝撃を媒介して公に転位させたとも述べており〔橋川 1968b＝1973：208〕、このことから橋川は社会主義への批判のニュアンスと共に、私的動機が公的で政治的なものに転位することを橋川が社会心理学の見地からみていることが分かる。

そして橋川が本論考にて、高島が社会主義／国家主義の狭間で「性悪説」に基づき大衆そのものを敏感な「実感」を持って捉えていたとみていることから〔橋川 1968b＝1973：209－210〕、政治の季節に直面した際の橋川は政治の主体を個別にではなく、塊としての大衆の特質に想定していたといえる。その際に橋川は、国家主義も社会主義も求める大衆の矛盾した本能を性悪説から高島が捉えていたとしており、それ故に高島は自由や平等を守る為に国家が邪悪性の統制をする必要があると唱えていたとみていた〔橋川 1968b＝1973：218－219〕。

さらに橋川は高島の社会主義／国家主義をめぐる二重性を分析する際、(1) 学究者としてのマルクス的な問題設定(2) シニックなりアリスト故の性悪説、という観点からみている。まず(1)について橋川は、高島が「いわゆる「国家＝搾取・抑圧機関」説と、「国家死滅」説とに対する正面からの疑問を出発点としている」〔橋川 1968b＝1973：214〕とし、それ故に「資本主義と階級搾取関係を排除したとき、国家は消滅するのではなく、かえって本来の国家の姿があらわれるであろう」〔橋川 1968b＝1973：215〕ことを高島が意図することで、マルクス主義の国家論そのものの止揚が想定されていたとみている。そして橋川は(2)については、高島が人間本性を悲観する故に皮肉な目でみていたことが、「彼(高島)は多分、自己の国家理論がなお「断片的」「でっちあげ」であることを例の皮肉な眼で見ていたはずである」〔橋川 1968b＝1973：216〕とし、「問題は階級支配の消滅のちに、人間本性に照らして何が究極のものとして残るかという問題であったと見てもよい」〔橋川 1968b＝1973：217〕と問うている。

以上の橋川の高島に関する語りからは、悲観的な人間観が生む国内レベルの社会変革のビジョンとは信頼醸成が不安定になる為、国家による大衆の統制への肯定を生んでしまうということが示唆されている。よって橋川にとって高島の「性悪説」とは、明治期に想定される近代をめぐる「敬愛／侮蔑」の感情でいうところの「侮蔑」の継承にあたり、自己存在の確立を阻むものとして想定されていると考えられる。

2－2 国内外一体化して現れた「純粋」な革新性

本節は前節とは逆に、明治期に想定される近代をめぐる「敬愛／侮蔑」の感情でいうところの「敬愛」の継承の考察をするが、ここでは橋川の語る「純粋」な革新性に着目してみる。

橋川は1969年に初出した論考「山本勝之助のこと」〔橋川 1969a＝1973〕で、少年時代に偶発的犯した殺人への贖罪を契機に自己存在と純粋に対峙する様になったとされるアナキスト・山本勝之助を、理論先行故に実感が伴ってないとされる社会主義者・堺利彦と対比させながら、犯罪者に内在する純粋な心情に寄り添っている。この構図については、橋川が政治の季節に際した革新派の問題点として、リアルな実感とは乖離するかたちで、理論に基づく組織化を図っていた日本マルクス主義の状況を懸念していた為と考えられる。なお橋川は本論文で大正期像を語る際に、社会主義の在り方をめぐってアナ派の大杉栄／ボル派の堺利彦のアナ・ボル論争があったことを示していることから、戦後日本の革新派に内在する問題が大正期に端を発しているという歴史意

識を持っているものと考えられる。さらに橋川の山本に関する語りに、青少年たちの純粋な孤独さや、ロシアのテロリストに似た過激な感傷性への着目がみられることから、橋川が山本をいわゆるロマン主義的な煩悶青年に位置づけているものと解釈出来る。そして、橋川が純粋な魂故の自己凝視及びシニシズムの要素を持つ人物として山本を描いていることから、あらゆる社会的権力への抗いの契機を含んだ確信的シニシズムによる自己対峙というかたちで、橋川が山本を革新性の原初形態に位置付けているものと思われる。なお橋川は昭和に入ってから山本について、アナキズムと民族的ナショナリズムを結びつけていく中で変革主体として軍へ働きかける様になったことを押さえる中で、石原莞爾との出会いをきっかけにより東亜連盟運動への協力を惜しまなかったことにも着目している。

次に橋川が1963年に初出した論考「佐々木到一という軍人」〔橋川 1963 = 1973〕において、日中戦争初期に「陸軍きっての中国通」として知られた佐々木到一に着目していることを考察する。橋川が本論考で「佐々木の生涯は明かに一つの悲劇である。それを象徴的にいえば、孫文を知り、彼を敬愛した時代の最後の日本人が、それ以降に展開した巨大な日中関係史の亀裂に激烈な自己解体を強いられ、その最後の希望を「満州国」という仮構の幻影に託さざるをえなかったという姿である」〔橋川 1963 = 1973 : 298〕と語り、中国への敬愛感を持ちながらも自己解体に至った人物として佐々木の心情を描いている。そして橋川は、「もし加害、被害という用語を用いるならば、少なくとも佐々木は日本陸軍主流による被害者であったばかりか、ある意味ではまた、中国国民党による被害者でもあった」〔橋川 1963 = 1973 : 294〕と述べ、佐々木が中国側と日本側の両方の橋渡しを試みた結果、両方から批判されるに至ったことを示している。さらに橋川は、佐々木を「純粋な実践派」と称し、「そのような(中国への実感と調査を基礎にした)佐々木のリアリズムが、軍主流の官僚的現実主義はもとより、その裏がえしとしての観念的革新主義にも彼をコミットせしめなかったのではないか」〔橋川 1963 = 1973 : 295〕と論じている。これらの橋川の佐々木像には、中国への「純粋」で「現実」的な「敬愛」を佐々木が持つが故に孤立化し自己解体に至ったというかたちで、「純粋」な革新性の中間形態が表現されていると考えられる。なお佐々木については、橋川が1965年に初出した論文「田中上奏文の周辺」でも、いわゆる田中上奏文の随所に大陸派軍人の佐々木の様なラジカルなシニシズムが露呈しているというかたちで挙げられている〔橋川 1965a = 1973 : 287 - 288〕。

以上、橋川の2つの論文を鑑みると、国内レベルに端を発したとされる山本も国外レベルに端を発したとされる佐々木も、「純粋」な実感を伴った革新性を担保しつつ、最終的には国内と国外の社会改造を一体のものと構想していたことが捉えられる。但し橋川の語りには、観念・心情のレベルで両者を評価する観点が強い故に、実際の両者の政策提言にあったとされる矛盾の視座は欠けていた¹⁹⁾。

2-3 人間信頼の醸成で自己存在を守る「超国家・主義」への共鳴

明治期頃に想定されるイロニイの大正期頃における継承を考察している本章では、1節で「侮蔑」の契機の継承を、2節で「敬愛」の契機の継承を検討してきた。本節においては橋川が、この「侮蔑／敬愛」という両契機が大正期以降頃にせめぎあいながら、大衆の自己存在を守るものとして確かに昇華されていったことを、北一輝の国内外一体化したレベルの「超国家・主義」のビジョ

ンを軸に語っていることに着目してみる。その際に本節では、橋川が既に代表作『昭和超国家主義の諸相』にて理想的人物として描き、本研究の素材である『順逆の思想』でも改めて指標としている北一輝について、「国家社会主義」と「アジア主義」の両要素を併せ持つ「超国家・主義」を唱えた人物として意味づけられることを示してみたい。

橋川が『順逆の思想』で語る北像の分析に際しては、「アジア主義」という国外レベルの側面については1973年に初出された論文「北一輝と宋教仁」〔橋川 1973 = 1973〕が、「国家社会主義」を焦点とした国内レベルの側面については1968年に初出された論考「北一輝と高島素之」〔橋川 1968b = 1973〕が手掛かりなるものと思われる。

まず橋川は論考「北一輝と宋教仁」においては、中国同盟会に属していた北一輝と宋教仁との友愛関係をふまえながら、宋を擁護する北のスタンスと、玄洋社の頭山満や黒龍会の内田良平の中国の革命支援のスタンスとの間に差異が生れていたことを示している。このことから、広く「アジア主義」といわれる諸人物の相関関係の中での北の独自のスタンスが捉えられることから、「アジア」への諸人物の相対的差異が捉えられる。特に橋川は本論考で、北について「いわゆる日本の「アジア主義者」の革命支援行動に対し、かなり手きびしい批判者であった…。そしてその要点は、彼らが根本的に中国革命に対する理解をもたないということであるが、北の場合には、とくに彼らが革命後の宋教仁路線というべきものを理解せず、かえってその反対者となったことに絞られる」〔橋川 1973 = 1973 : 244〕と述べ、北が宋との強い共感関係故に他の「アジア主義」者を批判したとみている。また橋川は本論考にて、北と内田の関係について「(北は) …正面から内田らの「思想」に反省を迫っている。…内田はかなりの年長者であるばかりか、その数年前には、「日韓合邦」という大芝居の黒幕として、その手腕を実証したばかりであった」〔橋川 1973 = 1973 : 247〕と述べていることから、内田が韓国で暗躍したことが「満韓侵略」および日清戦争開戦に繋がったことを北が非難していることが分かる。これらの橋川の語りからは、一般に「アジア主義」と括られがちな北と内田には、「アジア」への友愛の有無によって、日本の「アジア」侵略の一翼を担うか否かの決定的な相違が生み出されていたとみていることが取れる。つまり、「アジア」への友愛の差異が「アジア」侵略の承認の有無に直結したと捉えてみると、北というならば「超国家・主義」を保っていたのに対して内田は「超・国家主義」というべき「日本ファシズム」へ回収されていったことが出来るのではないか。但し橋川には、観念・心情のレベルで北を評価する観点が強い故に、国内改造と対外進出をめぐる北の矛盾や、北の政策提言をめぐる厳密性への視座が欠けていたといえる²¹⁾。

次に橋川の論考「北一輝と高島素之」においては、「性悪」とされる大衆を統制する国家像を持つ高島の「国家社会主義」とは異なるものとして、「天皇と国民の意志」の想定によって国家主権そのものが社会主義と同一化される北の「超国家・主義」というべきものが提示されていることに着目してみたい。この論文で橋川は、大正期頃に台頭してきた大衆の欲求を吸収するものとして「国家社会主義」をみるならば北もこの潮流に入ってくるとしながらも、北の革命思想の核心は「革命の出発点を国民を背景とした天皇大権の発動による憲法の停止に求めた」ことにある為、「革命の主動力をプロレタリアートに求めた社会主義思想とまったく微妙な断絶」があると述べている〔橋川 1968b = 1973 : 165〕。さらに橋川は北について、初期の自由民権論者のようにネーションをパトリオティズムのイメージで受け取っていた為に、「偏局的個人主義」と「偏局的社会主義」

を元々批判の対象としていたと捉え〔橋川 1968b = 1973 : 170〕, また「真に実在する人間とは…本来的に社会的存在としての人間であった」〔橋川 1968b = 1973 : 171〕という人間像をみていることから、橋川は北が高島のような「国家社会主義」に収まらない動機を有していたと解釈していたことが分かる。なお橋川が、北の示す「天皇と国民の意志」とは「国家人格実在論」〔橋川 1968b = 1973 : 183〕が想定されていた故に、北は天皇と国民の同一視を見通していたと述べていることから、橋川は北が人間の実存を「超国家・主義」というビジョンで死守していたとみていたことが窺える²²⁾。その為、北のビジョンが青年将校などに大きな影響力を持ったことで生れたとされる2・26事件についていえば、一般的には「超・国家主義」の初期段階として理解されがちであるが、橋川の場合は尖鋭化した大衆が北の「超国家・主義」のビジョンに積極的に共感したことの現れとして認識していることが分かる。但し橋川は北のビジョンを手放して理想化していた訳ではない。橋川は、個と全体を同一化しようとする北のビジョンにルソーの一般意志と同様の危うさを捉えており、「ルソーの一般意志が鋭利な「両刃の剣と化し、デモクラシーを擁護するかに見えて、リヴァイアサンの武装化におわたった」といわれねばならなかった」のと同じ様な状況が2・26事件に現れたとみている〔橋川 1968b = 1973 : 174 - 176〕。

おわりに

本論文では戦中派としての橋川が、日本ファシズムに積極的に回収されていったとされる人々にイロニイ的存在をめぐる自発的な「煩悶」を想定し、その源流を明治期の政治家達による列強への確信的恭順にある対外レベルの抗いに見出しながら、大正期頃にはそれが国内の大衆に広く伝搬されて国外・国内一体型の革新性が成立する中で、「超・国家主義／超国家・主義」の葛藤が深刻化していったという歴史像を作っていることをみてきた。

橋川は、日本のファシズム期に自己存在を守った確かなものは日本ロマン派であったという強烈な実体験を持っていた為に、戦後においても個人の実感を実感として捉えていたものと思われる。このことは橋川が『昭和超国家主義の諸相』において、「煩悶」の原初形態を家父長制への抗い故に潜在的には「父親殺し」にあたるテロに至った青年を据えた際に、身近な者への個人的な感情に機軸を置いていることからよく分かる。『順逆の思想』において橋川は、明治期の福沢諭吉や大正期の北一輝などの対外レベルの葛藤の心情を描く際に、アジアの革命の同志であった韓国人あるいは中国人との個人的な敬愛・友愛・共感関係の感情に力点をまず置いており、その人物が暗殺された際の衝撃を決定的なものとして位置づけている。特に橋川の福沢あるいは北などに関する対外レベルの言説からは、同志を通じて身内的同胞の様に思っていた中国や韓国などのアジア諸国に、同志が暗殺されたことで生れた恨み・侮蔑感が、アジアへの「敬愛」を失わせるきっかけになり得たことが読み取れる。さらに橋川は、同志という個人的感情を通じてアジアへの関心を持っていたとされる福沢や北らとは対照的に、アジアへの個人的感情に起因する関心が低かった人物として、帝国主義という外在的環境への対応への関心が強い伊藤や陸奥らを位置付けていると考えられる。

このことより橋川の語りには、自己感情を媒介した内在的要因／していない外在的要因という違いによって決定的な質の違いが表れているといえるのではないか。つまり、橋川が価値を置い

ている敬愛感に対照的な価値とは厳密にみると無関心・他人事であり、侮蔑感とは関心そのものを失っているわけではなく負の感情は存在している状態とみることが出来る。このように考えると、アジア／列強へ対峙する姿勢に内在する真の問題点は、敬愛を限りなく弱める侮蔑感はもとより、そもそも「実感」という感情を生む余地がない無関心・他人事の観にあるといえ、それを最も象徴するのは、帝国主義という外在的環境を所与のものとして合理的リアリズム²³⁾の外交を展開したとされる陸奥といえるかもしれない。橋川的外交観には、国際的パワーポリティクスの下で合理的に振舞う近代国家というプレイヤーを所与のものとしせず、対外政策には国内世論の影響があること、さらに国内世論には大衆を成す各人の「敬愛／嫌悪」の感情が反映されているという主張があり、国際政治レベル・国内政治レベル・大衆レベルを連動させて描いているという特徴がある²⁴⁾。橋川は『順逆の思想』に掲載した諸論文を通じて、「順逆」というイロニイに至ること自体に価値を置く一方で、アジアへ対する好悪や優劣といった外在的で相対的な感情に陥ることを危惧しており、それを防ぐ為には各自が自己対峙によって確かな自律性・主体性を培う必要があることを示唆している²⁵⁾。

これらの橋川の語りには、アジアへの加害性に関する外交的対峙という冷戦下で困難だった目下の緊急課題を克服する意識が強く表れており、冷戦構造という外在的環境に制約を受けながらもアジアへの自発的な対峙を唱えていた橋川の独自のスタンスが見受けられる。ここには当時の橋川が戦中の日本の「超国家・主義」を鑑みる際、心情としての「興亜」しか最終的には残せなかったことに、アジアへの平和主義的な贖罪観があることが感じられる。その際には戦中像を想う橋川が、帝国主義下という危機的状況下でも「興亜」という理想郷をイロニイとしては死守したというロマン的心情と、現実的・実質的には「脱亜」に回収されざるを得なかったという失望感との狭間にあったことが見受けられる。

しかし一方で橋川が提示した「脱亜／興亜」をめぐる概念には、アジアへの対峙と同時に列強への対峙の必要性も含意されていたといえ、このことについては対等な国家関係を前提とする現代の国際社会の外交の在り方に沿うビジョンであり現実的な意義あるスタンスであると思われる。冷戦という外在的制約が崩壊した現代の国際環境に際しては、新たなかたちでのナショナリズム対立が生じているものの、日本が戦中に帝国主義的構造下で負っていた列強からの被害性／アジアへの加害性、という外交レベルの二重の当事者性との対峙を経ることによって、アジアへの真の対峙、および歴史意識をふまえた真の自己対峙を培え得る時代になっていくかもしれない。このことによって初めて(α)近代の帝国主義という絶対的普遍的な問題と(β)加害／被害の二重性という相対的特殊性の問題、との因果関係の中で自己存在を自発的に規定していくことが可能になるものと思われる。このように考えると、明治期頃に端を発するとされる近代の帝国主義への「恭順／抗い」をめぐる普遍性／特殊性の問題を克服するという課題は、本質的には近代以降を生きる全ての人々に迫っているのである。そしてこの課題に際しては、各国・各個人がおのの置かれた特殊・相対的な事情による疎外感および自己欺瞞を生まない為にも、自らの特殊個別な問題が近代をめぐる普遍的な問題に起因するというビジョンを媒介することが、近代以降のあらゆる時期・あらゆるレベルの他者の特殊個別な問題へ実感を持って繋がり寄り添う想像力を培う契機になるものと思われる。

〔参考文献〕

- 葦津珍彦 (2007). 『大アジア主義と頭山満』 葦津事務所
- 大谷正 (2015). 『日清戦争』 中央公論新社
- 岡崎久彦 (2011). 『明治の外交力』 海竜社
- 岡野八代 (2015). 『戦争に抗する』 岩波書店
- 岡本幸治 (1996). 『北一輝』 ミネルヴァ書房
- 岡本隆司 (2011). 『李鴻章』 岩波書店
- 片山杜秀 (2015). 『近代日本の右翼思想』 講談社
- 北一輝 (1926 = 2005). 「日本改造法案大綱」『北一輝思想集成』 書肆心水
- クリストファー・W・A・スピルマン (2015). 『近代日本の革新論とアジア主義』 芦書房
- 赤藤了勇 (2000a). 「解題」『橋川文三著作集 1』 筑摩書房
- 赤藤了勇 (2001a). 「解題」『橋川文三著作集 5』 筑摩書房
- 赤藤了勇 (2001b). 「解題」『橋川文三著作集 9』 筑摩書房
- 赤藤了勇 (2001c). 「解題」『橋川文三著作集 10』 筑摩書房
- 竹内好 (1963 = 1977). 「解説 アジア主義の展望」『アジア主義』 筑摩書房
- 竹内好・橋川文三 (1974). 『近代日本と中国・上』 朝日新聞社
- 竹内好・橋川文三 (1974). 『近代日本と中国・下』 朝日新聞社
- 田中彰 (1984). 『「脱亜」の明治維新』 日本放送出版協会
- 田中秀雄 (2014). 『日本はいかにして中国との戦争に引きずり込まれたか』 草思社
- 筒井清忠 (1994). 「解説」『昭和ナショナリズムの諸相』 名古屋大学出版会
- 坪内隆彦 (2011). 『維新と興亜に駆けた日本人』 展転社
- 西村幸祐 (2015). 『21世紀の「脱亜論」』 祥伝社
- 橋川文三 (1963 = 1973). 「佐々木到一という軍人」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1964 = 1973). 「曖昧な感想」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1965a = 1973). 「田中上奏文の周辺」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1965b = 1973). 「日中問題とは何かということ」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1968a = 1973). 「福沢諭吉の中国文明論」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1968b = 1973). 「北一輝と高島素之」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1969a = 1973). 「山本勝之助のこと」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1969b = 1973). 「伊藤博文と中国」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1970 = 1973). 「東亜共同体の中国理念」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1972a = 1973). 「田中義一と幣原喜重郎」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1972b = 1973). 「福沢諭吉と岡倉天心」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1973 = 1973). 「北一輝と宋教仁」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1973). 「あとがき」『順逆の思想』 勁草書房
- 橋川文三 (1970 = 1994). 「昭和維新の論理と心理」『昭和ナショナリズムの諸相』 名古屋大学出版会
- 橋川文三 (1971 = 1994). 「日本ファシズムの思想的特質」『昭和ナショナリズムの諸相』 名古屋大学出版会
- 橋川文三 (1973 = 1994). 「日本ファシズムの推進力」『昭和ナショナリズムの諸相』 名古屋大学出版会
- 橋川文三 (1974 = 1994). 「昭和維新とファシショ的統合の思想」『昭和ナショナリズムの諸相』 名古屋大学出版会
- 橋川文三 (2000). 『黄禍物語』 岩波書店
- 橋川文三 (2000a). 「日本浪漫派批判序説」『橋川文三著作集 1』 筑摩書房
- 橋川文三 (1968 = 2000b). 「西郷隆盛の反動性と革命性」『橋川文三著作集 3』 筑摩書房
- 橋川文三 (1980 = 2000b). 「西郷隆盛の謎」『橋川文三著作集 3』 筑摩書房
- 橋川文三 (1964=2001a) 「昭和超国家主義の諸相」『橋川文三著作集 5』 筑摩書房
- 橋川文三 (1966 =2001a) 「北一輝と大川周明」『橋川文三著作集 5』 筑摩書房
- 橋川文三 (1967=2001b) 「安保後八年目の独白」『橋川文三著作集 6』 筑摩書房

- 橋川文三 (1969=2001b) 『葦津珍彦著『武士道』』『橋川文三著作集 6』筑摩書房
 橋川文三 (2013). 『昭和維新試論』講談社
 長谷川雄一 (2014). 『アジア主義思想と現代』慶應義塾大学出版会
 松本健一 (2007). 『思想としての右翼』論創社
 モーゲンソー・J・ハンス (2008). 『国際政治』福村出版
 山本勝之助 (1989). 『日本を亡ぼしたもの』評論社
 渡辺京二 (2007). 『北一輝』筑摩書房
 渡辺利夫 (2008). 『新 脱亜論』文藝春秋

【注】

- 1) 橋川文三について、筆者は次の論文を発表している。山之城有美「戦後日本における橋川文三の「1930年代像」——「日本浪漫派批判序説」を素材として——」（『人間社会研究科 紀要 第20号』日本女子大学大学院人間社会研究科, 2014年）、同「社会的自我像をめぐる普遍性／特殊性の考察——橋川文三が語る日本ロマン派の「煩悶」の論理——」（『人間社会研究科 紀要 第21号』日本女子大学大学院人間社会研究科, 2015年）、同「橋川文三——「イロニイ的存在」としての「煩悶」のビジョニー」（『戦後思想の再審判』法律文化社, 2015年）、同「橋川文三が語る「煩悶」の内在的構造——1970年代における「仮構」性を超克するビジョニー——」（『人間社会研究科 紀要 第22号』日本女子大学大学院人間社会研究科, 2016年）。本論の内容は、これらの論文と重複する部分がある。
- 2) 『日本浪漫派批判序説』は、同人雑誌『同時代』の第四号（1957年3月15日発行）から第九号（1959年6月5日発行）において最終章を除き連載発表され、その後『日本浪漫派批判序説』（1960年2月、未来社刊）に初めて収められた〔赤藤 2000a: 359 - 360〕。なお本論考のタイトルの表記には「漫」ではなく「曼」が使用されている。
- 3) 『昭和超国家主義の諸相』は、1964年11月15日発行『現代日本思想体系』第31巻「超国家主義」（橋川文三編集・解説、筑摩書房刊）に発表され、『近代日本政治思想の諸相』（1968年2月、未来社刊）に初めて収められた〔赤藤 2001a: 368〕。
- 4) 橋川は1930年代前後の青年の自己存在をめぐる「煩悶」がテロリストとなった朝日平吾の心境に尖鋭化して見出されるとし、「明治的右翼もテロリズムに訴えることはしばしばあった。しかし、朝日のようなタイプのテロリストはそれ以前にはなかったといってよいであろう。それは前者の多くが同じように不安定な社会的地位におかれた士族出身者であったとはいえ、彼らはたとえば朝日のように、「吾人は人間たると共に真正の日本人たるを望む」というラジカルな不遇感をいだくまでにはいたらなかった。しかし朝日の場合には、自己の存在が完全に断片化され、原子化された人間以下のものであるという強烈な挫折感がいだかれていた」〔橋川 1971 = 1994: 107〕と述べている。
- 5) 日本の「超国家主義」に際しては片山杜秀が述べる所の、丸山眞男が極端な国家主義としての「超・国家主義」像を示したのに対し、橋川は国家を超える主義としての「超国家・主義」像を提示したという分析が端的に妥当なものと考えられる〔片山 2015〕。片山は、「ごく少数の異端者をのぞくすべて」が「右翼」であったとみて、西田幾多郎や阿部次郎や長谷川如是閑などをも「右翼」の潮流に乘せる試みをしている。
- 6) 『順逆の思想』の「あとがき」には、「「初出覚え書き」によってもわかるが、本書収録エッセイは雑誌『中国』にのせたものが大きな部分を占めている」と記され、「近代日本と中国との交渉にかかわりのある人物や問題について述べたものばかり」が収録された評論集であるとされている〔橋川 1973: 415 - 416〕。
- 7) 松本健一は、黒龍会の内田良平が韓国併合の際に最終的にアジア主義を手放した原因として、「アジアのナショナリズム運動が、その打倒の対象に日本帝国主義をふくむようになった」ことを挙げながら、「日本のナショナリズムが革命性を失わず、右翼が体制に組みこまれていないならば、アジア主義も放棄のうき目を見ることはないのである」〔松本 2007: 59〕と述べることで体制への迎合を問題視している。

- 8) 明治期の「興亜」については松本健一が、右翼と左翼の源流といわれる西郷隆盛の後継とされる玄洋社の頭山滿が中心になってアジア主義が唱えられていた流れがあったと述べている〔松本 2007〕。その際に松本は西郷について、頭山に象徴されるいわゆる右翼の源流と、中江兆民に象徴されるいわゆる左翼の源流という、前衛主義的な両契機を生み出したと述べている。なお松本は、西郷は右翼／左翼のみならず体制／反体制にも組み込まれない包括性を持った人物であったとしている。
- 9) 老荘会については松本健一が、「老荘会は、大正八年後半までの一年ほどのあいだに、二十数回の集まりをもった。この会員としては、大井・大川・満川・嶋中らのほかに、国家社会主義者の高島素之…、社会主義者の堺利彦…、農本主義者の…権藤成卿、大アジア主義者…、桃太郎主義者の渥美勝、…いちおう国家主義者…、などがあった」〔松本 2007：156－157〕と述べている。このことから、橋川には大正期頃のような思想家を包括し得た老荘会のメンバーを「超国家・主義」のビジョンの原初形態・中間形態・完成形態に位置づける意図があったことが捉えられる。
- 10) 橋川は、明治期の左翼と右翼の源流に言及している葦津珍彦の作品について「中江兆民と頭山滿、幸徳秋水と内田良平という、一般に両極と見られている二組の子弟関係を設定し、そこから昭和期に及ぶ近代日本の左右両翼の発想様式を導き出すという、きわめて独創的な作業が行われている」〔橋川 1969＝2001b：321－322〕と評価している。

なお橋川が1930年代頃にアクセントを置いた歴史像を示していたことは、「広義のとらえ方（古典的右翼とされる玄洋社・黒龍会、大正期の猶存社、昭和期の軍人・農本主義者・神職者・革新官僚・共産主義転向者などの統一的把握）を捨象し、ファシズムが世界史的に登場してきた時期——一九二〇年代から三〇年代にかけての思想動向の一環として日本ファシズムを見ることにしたい」〔橋川 1971＝1994：106〕と述べていることから分かる。

また橋川は1930年代前後の多様な社会改造運動を認識として、「第一次大戦が日本の内外にひきおこした諸矛盾を解決しようとした広い意味での社会改革＝国家改造の思想・運動は、大川周明の言葉をかりるならば、「第一は無政府主義的傾向のもので、故大杉栄氏をその代表者とします。第二には後の共産党となるもの。第三は後の諸無産政党となれる社会民主主義的傾向のもの。第四は高島素之氏を中心とする国家社会主義的傾向のもの。第五は即ち『猶存社』を中心とするもので、具体的政綱においては国家社会主義と類似しているけれどその拠って立つところの精神的基礎は純粋として日本的なる点において前者と異っております」とされるように、極右から極左にわたる多様な形態をとっていた」〔橋川 1970＝1994：58〕と述べている。

- 11) 橋川は、北一輝が大陸浪人型のアジア主義者や権力主義的中国革命観に対しては疑念を抱いていたとしている〔橋川 1966＝2001a〕。
- 12) 『昭和維新試論』は、季刊雑誌『辺境』（井上光晴編集・辺境社発行）第1号（1970年6月）から第2次第1号（1973年10月）まで、休載された第6号を除き10回連載で発表された。著者の没後、全文が単行本として刊行（1984年6月17日、朝日新聞社）された〔赤藤 2001b：370－371〕。文庫化にあたっては1993年に刊行された朝日選書版が底本とされ、2007年には筑摩書房が刊行し、2013年には講談社が刊行している。
- 13) 『黄禍物語』は、1970年8月号『中国』（第81号、中国の会編集・徳間書店発行）から、82号、84号、87号、88号、90号、92号、94号、95号、97号、99号、101号、103号、105号、107号（1972年10月）の各号に15回連載で発表されたのち、大幅な編集作業が行われ、単行本として刊行（1976年8月25日、筑摩書房刊）され〔赤藤 2001c：392〕、岩波現代文庫（2000年8月17日、岩波書店刊）にも収められた。
- 14) 橋川は、福沢が「脱亜論」という強硬に及んだ決定的要因を明示はせずに「韓国問題」としているが、これは国内改革の教えを乞う目的から福沢と親密な交流があった朝鮮開化党の金玉均が、甲申事変での開化党の破滅に伴い中国との和平工作を試みた矢先に暗殺されたことへの衝撃が大きいといえる。また、金の暗殺に加担した中国と韓国の専制政府についての言説を従来のアジア主義の研究でみると、独立運動を憎んでいた故に、中国は祝電を發し、韓国は遺骸をさらしものにしたとされるが〔葦津 2007：56－57〕、橋川のスタンスにおいてはこの「韓国問題」は日本側が帝国主義という環境への恐れからアジアへの敬愛の念が弱まった故に、結果として両国へ独立の真意が伝わ

らなくなったという意味合いで解釈されるものと考えられる。

なお葦津珍彦が語るアジア主義の言説では、金がアジア主義の象徴である頭山満とも親密な交流関係にあったことが述べられた上で、頭山が担っていた玄洋社が韓国独立に対する援助をしたことが玄洋社の大陸政策への初段階と位置付けられている〔葦津 2007: 57〕。ここで葦津は頭山について、いわゆる征韓論の第一人者である西郷隆盛の亡き後で玄洋社を立ち上げ、西郷の征韓論への真意とされる「日本の国権を維持し独立を確保して行くのには、絶えず欧米列強の圧力に対する抵抗の決意が大切…。…韓国の事に関しているけれども、真実の論争点は、むしろ欧米列強に対する日本外交の姿勢を、いかに定めねばならないかという点についての対決」を背負った人物として描いている〔葦津 2007: 19〕。

- 15) 橋川は李と伊藤の対立関係を、西郷隆盛と大久保利通の関係に重ねて語っている。その際に橋川が「西郷は朝鮮の無礼を東洋的な事実としてみており、大久保は同じものを西洋的な論理に照らして見ている」と述べていることから〔橋川 1980 = 2000b〕、橋川が前近代／近代をめぐる「(東洋的) 事実／(西欧的) 論理」も念頭にしていたことが分かる。
- 16) 橋川は、近代への価値を置く伊藤とアジア主義のスタンスの違いにも言及し、「宮島会談(明治40年に安芸の宮島で行われた伊藤と後藤新平の対アジア政策会談)において、後藤はその持論たる「大亜細亜主義」と「新旧大陸対峙論」(ヨーロッパ・中国・日本を含むユーラシア大陸と、アメリカとの対立が顕在化するであろうという主張)の二本立てで議論を展開したが、その両者に対して、伊藤は猛烈に反論している。…。伊藤は後藤の大アジア主義を、大陸浪人的粗雑の論として斥けることによって、却って後藤の真意をただそうとしたのかもしれない」〔橋川 1969b = 1973: 153〕と語っている。

なお橋川が語っていない伊藤の外交政策とアジア主義の違いについては、葦津珍彦の言及が参考となる。葦津は、アジア主義が伊藤に対して行なった①欧化主義政策批判や②日露戦争決断の談判などを挙げている〔葦津 2007〕。①については、条約改正問題に際して当時のアジア主義の潮流を成していた国粋主義と民権主義の両方から政府の欧化主義が糾弾された為、伊藤は世論を鎮めるのに苦慮したとされ〔葦津 2007: 37 - 38〕、玄洋社の頭山の指導下で大隈外相へのテロも起ったといえる〔葦津 2007: 42 - 44〕。②については、伊藤がロシアとの妥協外交に際して当時のアジア主義の潮流を成していた中江兆民や内田良平の両翼から対露決戦の決断を迫られたこと、また、西郷隆盛を崇拝していた病床の中江は頭山に伊藤への談判を託したことが挙げられる。

- 17) 岡本隆司は、李鴻章は国際法や国際関係を知らなかったはずはなく、国内の攘夷・排外・「清議」勢力からの批判と対外的な脅威との板挟みの中で対処し得たのが「属国」維持の方針であったと述べている〔岡本 2011: 160 - 161〕。
- 18) 「性悪説」を唱えていたホブズの人間観とは、自分自身の善良さに自信があっても自分以外の人々の善良さは信頼出来ないということに基づき、自己保存の本能と他者に対する不信感から成るとされる〔岡野 2015: 181〕。
- 19) 山本には、石原莞爾から日本の変革主体は軍隊ではないことを諭されたことで、再び「世界人道の道」に戻ったという経緯があったとされる〔山本 1989: 363〕。佐々木には、中国の共産主義化への肯定／否定をめぐる矛盾があったとされる〔田中 2014: 56〕。
- 20) まず橋川が既に代表作『昭和超国家主義の諸相』で、「「アジア主義」と「超国家主義」とは、つねに相補的な思想圏を描いて相互に移行する関係にあった」〔橋川 1964=2001: 47-48〕としながら石原莞爾及び石原が指導した東亜連盟の思想を理想に位置付け、東亜連盟の運動が挫折した原因を「北一輝・井上日昭らの信奉した法華経信仰に根ざしている」〔橋川 1964=2001: 51〕ことにみていることから、「アジア主義」と「超国家主義」との関係に北が影響していることが間接的に読みとれる。

次に橋川が1970年代前半に初出した諸論考を掲載している『昭和ナショナリズムの諸相』〔橋川 1994〕において、「(猶存社の) 中心人物は北・満川・大川周明の三人です…。…この猶存社の中心スローガンが日本国家改造とアジア解放というもので、その理論的操典が北一輝の「国家改造法案」に求められたことは周知の通りですが、その意味からしても、この団体がその後の日本ファシズム運動の本格的な出発点であったことがわかります」〔橋川 1973 = 1994: 123 - 124〕と述べている

ことから、北の所属した猶存社が北の理論に基づき「国家改造」と「アジア解放」を目指したことが「日本ファシズム」の契機になったとみていることが分かる。

さらに橋川が『昭和ナショナリズムの諸相』において、「大正期に入るとともに、いわゆる「民衆」の政治世界への進出は高まり、とくに第一次大戦の下で、デモクラシーの理念はしだいに大衆的欲求と結びつき始めた。伝統的権威の後退はたとえば米騒動によって明らかとなり、かつての「臣民」的政治意識にかわって、政治は「民衆」ないし「大衆」の人間的な欲望の調整システムとして世俗化されるようになった」〔橋川 1971 = 1994 : 108 - 109〕と述べていることから、大正期に入ってからの大衆の政治への進出の拡大が取れる。

これら的大正期頃についての橋川の語りを鑑みると、橋川は北を指標にすることで、北の「国家改造法案」に基づいた国家改造を象徴する「国家社会主義」と、北の「国家改造法案」に基づいたアジア解放を目指す「アジア主義」が、大衆の欲望を吸収しながら「超国家・主義」としての日本ファシズムを生み出したとみていることが導かれる。

- 21) 橋川が語っていない北の国内／国外改造をめぐる矛盾については、(1) 北は中国革命に挫折した故に国内改造に向かったという指摘〔竹内 1963 = 1977 : 50〕や、(2) 北は初めから共同体国家の追求と対外膨張の論理を内包していた故に、対外戦争の為の国内改造を唱えるに至っていたとする指摘〔渡辺 2007 : 317〕がある。また、北が帝国主義を「否認」していたとする橋川に対し、北は平民社会主義の非戦論に敬意を払っていたというべきであり、故に「否認」は妥当でないとする指摘〔岡本 1996〕もある。
- 22) 橋川は、北一輝の思想形成に影響を与えた人物として「第二革命」を行ったとされる西郷隆盛を挙げるかたちで、北には亡ぶべき革命性を容認するという矛盾が内在していたのではないかという論点を出している〔橋川 1968 = 2000b〕。
- 23) 日本ファシズムをめぐる合理的リアリズムの問題は、いわゆる京都学派が想定した近代的主体の在り方の問題からもみること出来よう。片山杜秀は、西田幾多郎や田辺元らの「近代の超克」の理論に触れつつ、あるがままの日本の現実を受け入れる高山岩男の「事実主義」などに言及している〔片山 2015〕。
- 24) 国際政治学における現実主義者といわれるモーゲンソーは対外・対内政策の兼ね合いについて、「合理性を旨とする対外政策の理論は、まずは、…（対外政策が民主的政治の諸条件の下で処理される場合には）非合理的な諸要素から、経験のなかにみられるはずの合理的な本質を表わすような対外政策像を、いわば抽象し描写しなければならない」〔モーゲンソー 2008 : 6 - 8〕と述べている。
- 25) 橋川は『順逆の思想』の諸論考にて、外交レベルの語りを通じて帝国主義自体を問題視するに至っていたといえる。このことは、例えば橋川が論考「田中義一と幣原喜重郎」〔橋川 1972a=1973〕で、世界征服を目論む怪文書とされた「田中上奏文」を語る際に、帝国主義的枠組から脱しているか・いないかという問題意識が捉えられることから分かる。